

【鵜飼 伝統の技】

今日の鵜飼漁師が使う技能と方法の多くは、江戸時代（1603～1867年）からほとんど変わっていない。鵜飼の歴史を示す絵には、鵜匠の姿が描かれている。彼らは今日とちょうど同じような方法で、多数の鳥の縄を管理し、舟首からぶら下がる籠の火に燃料を供給している。こうした絵には、漁舟が編成を組み、観衆のために手間をかけた演出を行う様子も描かれている。これもまた、今日に残る伝統である。

総がらみ

毎夕の漁のクライマックスとして、総がらみとして知られる編成が組まれる。総がらみは、文字通り「すべてつながり合う」という意味である。鵜舟は長良川橋のすぐ手前で向きを変え、上流に戻る。ある程度の距離を航行した後、鵜舟は向きを変え、再び下流に向く。夜の時間の大部分において、鵜舟はばらけた配置で下流に向かって移動するが、今度は岸から岸に広がる一直線の配置に変わる。船員は舵を取りながら、オールで舟の側面を叩く。隠れている鮎が驚き、姿を見せる。船員の前で鵜が水に飛び込み、舟は長良川橋に戻って行く。土手沿いに並ぶ観光船の乗客に向けた、非常に印象的な見せ物となっている。

総がらみの正確な起源は分かっていない。表向きは、鮎を土手沿いの浅瀬から追い払い、鵜の進路に誘い込む効果があるとされているが、実益は極めて小さい。江戸時代、総がらみはおそらく、実益のためではなく、支配的な立場にあった尾張藩の訪問者や、この地を訪れた他の要人らに敬意の表すためのショーとして発展した。

鵜の縄を管理する

鵜匠は舟首の片側にもたれかかり、10～12羽の鵜に結ばれた長い紐を管理する。鳥はどの方向にも自由に素早く飛び込めなければならない。そのため、鳥の縄はもつれないようにしておく必要がある。縦横に交差する紐を左手に持ちながら、鵜匠は右手で巧みにもつれた縄を分かち、その後、ほどけた縄を左手に戻す。なんと、鵜匠は縄を管理するのと並行して、捕った鮎を回収するため、舟に鵜を引っ張り込むのである。

縄を引き上げる

鵜舟は長良川を下りながら、浅瀬の上を通過することがある（舟は川床すれすれのところを通る）。鵜匠は川が浅くなる場所をよく知っているので、浅瀬に近づくと、鵜の縄を高く引き上げ、鵜が潜って舟の下敷きになるのを防止する。

火の籠に燃料を供給する

鵜の縄の管理や捕れた鮎の回収のほか、舟首からぶら下がる鉄の籠の中で燃える火を維持することもまた、鵜匠の仕事である。火が燃えると鵜匠は定期的に火に薪を加え燃やし続けなくてはならな

い。篝火と呼ばれるこの火は、鵜に照明を提供すると同時に、鮎を水面におびき寄せる。火をできるだけ明るく燃やすため、漁師は赤松（樹脂分が多く、容易に燃える木）を使う。実は、この炎は鉄の籠のリングを歪めるほどに熱いのだ。